

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	あぢきなさ : 詩歌
Author(s)	葉二
Citation	龍南會雜誌, 152: 91-92
Issue date	1913-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6295
Right	

ちやめるめらの部落行く匂ひ、
目籠の頼のかすく
手まさぐる若きかひなに
やるせなき柔毛の震慄。

さんたまりや、をどめは謠ふ
混血の舌の震音、
祖先を故國を想ふか
優雅に鬱憂に。

空かほる潮の遠鳴り、
瑠璃色の沖走る帆は
おらんだかはたほるとがる
見る目憂きざぼんの烟。

あゝざぼん、芳烈の香に
噎び泣く俚謠の色彩、
うち、震ふその唇に
はにかみの甘き接吻。

あ ぢ き な さ

— X の君 —

葉

二

暫らくの別れのきはに猶もわが云ひ得ぬ心あぢきなきかな
踏み越わし七重の山をかへり見て淡き誇に街に入りたる
幸ありと思ひし夢のさめしころ世にはなれたる心ちするかな
夜汽車待つ山の小さき停車場にわれをめぐりてこほろぎの鳴く
葉鶏頭薬園町の杉垣のあひより見えて秋晴るゝかな

われとよく争ふ妹我が居間にさうび持ち來ぬ秋立ちければ
うす黄なるほぶらそよげり秋立ちし病院うらの濱の夕日に

瘡 痕

永劫とこほに癒わがたき胸の瘡痕よつとめはげみて唯なくさめむ
男の子われあゝこの度はこの夏はかならず人に勝たむとぞ思ふ

春 秋

ついでついでとんぼ

鏘 乎

月夜涼み場満ち潮サラと遠淺に
萎み葉に飛ばぬ蟬のあり遠雷す
早り野路を遠埃する管笠が
今日もく雨待ち宵を蚊食鳥
遠のき雷ひき水音冴に青嵐
醫師呼ぶと町へ夜人力車を稻妻す
火に識りし谷間の家もきりくす

よな、白き草を秋風山下りに
店に聞く琵琶など温泉宿秋たちて
霧裂けて放し飼牛の裾野廣口
乳母歸ると泣く子を蜻蛉秋晴れに
落ち釣瓶探朝る寒を姉病めり
大悟の朝雁來紅に月淡し
折詰もふらと濠沿ひ天の川
遠乗馬水かふ萩に魚影して
小春祭日障子張る日椽病後に